



## 「アゲハチョウ」

和歌山大学教育学部附属中学校 一年 狗巻 友祐

夏になった。今年も庭の小さいミカンの木に、アゲハチョウが卵を産みに来た。木のそばを通る度にサナギになる前の緑色の大きい幼虫たちが葉にたくさんいるのを見ていた。でもこの幼虫を見る度にあのことを思い出す。

小三のとき、学校でアゲハチョウの変態の勉強を理科でやった。みんなで観察するために学校へ幼虫を持って行き、家でも飼育箱に入れ玄関のくつ箱の上で観察した。終れい幼虫といわれる緑になった何ともかわいらしい幼虫は、サナギになった。緑色っぽいサナギはだんだん黄色がかった。図かんには八日から二週間で羽化すると書いてある。毎日、今日か今日かと待った。しかし、書いていた日数をとくに過ぎてアゲハが出てこないのだ。サナギに無事になっても、羽化できないものもあるのだろうかと思っ心配だった。

日数がたちすぎたので半ばあきらめていたサナギになつて二十日後、学校から帰ると飼育ケースの中でなぜか一ぴきのハチがブンブン飛んでいる。あれ？どこのすき間から入ってきたのだと不思議な気持ちで見た。アゲハチョウの幼虫をみて、小学三年生の時のアゲハチョウの変態の観察記録を思い出す。羽化が遅く、半ば諦めていたとき、蝶に寄生していた蜂が現れた。美しい蝶を期待していただけに蜂を見てショックを受ける。しかし、今ではそれが一方的な見方であったことに気付く。蜂にとつては蝶への寄生が生きていくために必要なことだったんだと。臨場感あふれる豊かな表現で出来事を詳細に記述し、自然の摂理を冷静に見つめている。

### 講評

庭にいたアゲハチョウの幼虫をみて、小学三年生の時のアゲハチョウの変態の観察記録を思い出す。羽化が遅く、半ば諦めていたとき、蝶に寄生していた蜂が現れた。美しい蝶を期待していただけに蜂を見てショックを受ける。しかし、今ではそれが一方的な見方であったことに気付く。蜂にとつては蝶への寄生が生きていくために必要なことだったんだと。臨場感あふれる豊かな表現で出来事を詳細に記述し、自然の摂理を冷静に見つめている。

でも、その考えは間違っていて一方的かなと今は思える。アゲハチョウの身になれば、寄生バチに命をあげたことになるので、寄生バチはひどいやつだということになる。しかし、寄生バチの身になれば、無事アゲハの幼虫を見つけて卵を産めて、羽化できたものだということになる。一ぴきのアゲハチョウは二百の卵を産むそうだが、そのうち無事チョウになるものは一つか二つらしい。全部チョウになっても、増えすぎて食べ物が足りなくなり種の保存がかえってできないそう。幼虫が鳥に食べられたり、寄生バチに寄生されたりして、一定の数を保って、それで自然はうまくバランスがとれているらしい。その、バランスを保つ仕組みには、ぼくたち人間からすれば、悲しみや、むごさみたいなものがふくまれているのだと感じた。でもそれはアゲハチョウという生き物の側から見るとなのだった。チョウも、ハチも、どちらも精いっぱい習性にしたがって生きている、ただそれだけのはずだ。自然の中のひとつの命を、一方からだけ見ることはやめようと、この寄生バチの体験から思うようになった。アゲハチョウも、アゲハヒメバチも、ぼくも、一生けん命自分のやるべきことをやって今日も生きている。それが大切で、それだけですばらしいことなのだなと思う。

